

探訪 北の風景 62

城壁を思わせる笹流ダム

函館市

青木和弘

函館市中心部から北へ約10キロメートル、車なら15分ぐらいの赤川地区に、観光ガイドブックにはあまり紹介されない珍しいダムがある。笹流(ささながれ)ダムだ。芥川賞作家の辻仁成が次のように紹介している。

〔略〕：森の奥に古代帝国の要塞の城壁を思わせる建造物が聳(そび)えていて。周囲の木々の不思議な調和。東京の小河内(おごうち)ダムを設計した小野基樹の設計による、バットレス形式の水道ダム。当時高価だったコンクリートを節約する工夫からこのユニークで端正なデザインは生まれたのだそうだ



「またダムの上を歩くと、一層その神秘性を体験することができる。貯水池の水は深いエメラルドグリーンで何か霊的なものさを感じるほどだ。上空に広がる碧空と貯水池を囲む木々の緑とそれから翡翠(ひすい)石のような池のおもてが、とにかくダムの上の狭い歩道を歩く者を圧倒する。人工の建築物なのに、その環境との抽象的な調和が、異次元空間に私を誘う(辻仁成『函館物語』より)

笹流ダムは、亀田川の支流笹流川をせき止め、1923年(大正12年)に完成した。この形式のダムとしては日本で初めて造られたもので、ダムに貯めた水は函館市民の飲み水になっている。2001年日本土木学会が、「函館市の水道施設群」として、元町配水場とともに「選奨土木遺産」に認定している。

幕末の1859年(安政6年)箱館が開港。外国船が来るようになると、いままでもなかつた伝染病が持ち込まれるようになった。1877年(明治10年)ごろからコレラが度々流行し、1886(明治19)年には患者1022人、死亡者846人の大流行になった。急激な人口の増加に上下水道の整備が遅れていたためだ。

函館に待望の上水道が完成したのは、1889年(明治22年)で、当時の函館の人口は約5万3000人。それでも急増する人口に供給は追いつかず、大正のはじめには毎日6時間から12時間の



笹流ダムの上の歩道から眺める「笹流貯水池」は、意外なほど水面が近い。四季折々清々しさをたたえている

断水が行われるほど慢性的な水不足に悩まされた。笹流ダム着工の前年、1920年(大正9年)の函館の人口は13万354人にまで膨らんでいた。笹流ダムの工事は順調に進んだわけではない。1921(大正10)年の函館大火(2141戸焼失)や1923年の関東大震災でセメントや鋼材など資材の調達に遅れを強いられたのだ。

バットレスダムは国内で10基建設されたが、道内ではこれが唯一。現存する6ダムのうち上水専用は笹流ダムだけである。

実はこのダム、操業開始当時の姿そのままではない。1983年(昭和58年)と翌年に大改修が施され、古いダムの意匠を生かしたまま新しいダムで包み込むような工事をおこなった。だから以前より格子が太くなったが、デザインは洗練され



日本土木学会の「選奨土木遺産」である笹流ダム。日本で最初に建造された貴重なバットレス型ダムで、函館市民の飲料水を供給している。日本ではこれまでに10基造られ、6基が現存し北海道では唯一のダムである



ダム頂上の歩道から緑に包まれた前庭広場を見おろす。桜や紅葉がきれいで、「赤川の水源」として函館市民から親しまれている。遠くに見えるのが函館山

たといわれている。歴史遺産を大切にしようという函館市民の理性を私は感じた。

笹流ダムと、そこから北へ約5キロメートルにある新中野ダムのある「亀田川水源の森」は、林野庁が選定する「水源の森百選」の一つである。面積は3224ヘクタールで、標高は100〜1000メートルに位置する。ブナ・ミズナラ・ダケカンバ・イタヤカエデ・トドマツ・スギ・トチノキ・サワグルミ・ウワミズザクラなど、林齢5〜110年の天然林100パーセントで、針葉樹が65パーセント、広葉樹が35パーセントを占めている。

笹流ダム前庭広場は、古くから「赤川の水源」として親しまれ、春は桜、秋は紅葉の名所として多くの市民が訪れている。